

「生活科」導入時の学びについて
——女子大生の思い出し記録内容の分析から——

今井 邦枝*・栗原 泰子**

About the Learning at the beginning of “Life Environment Studies”
Study about Remembering Record
Contents of Woman Students

Kunie IMAI, Yasuko KURIHARA

要 旨

平成元年の小学校指導要領の改訂において、「生活科」が新たに導入された。「生活科」の特質としては、直接体験を通して、身近な地域や自分の生活に関する活動を行うことである。この生活の中で体験を通して学ぶという考え方は幼児教育の基本的な考えと同じといえる。小学生の時に「生活科」の授業を受けてきた学生は、様々な活動や体験を通して学ぶという経験をしてきていることになる。その経験は、幼児教育を学ぶことにおいても有効であると考えられる。

本研究においては、学生が実際に受けてきた実施当初の「生活科」について、思い出し記録の内容を分析し、学生がどのように捉えているかを明らかにすることを目的とした。その結果、学生は直接体験を通して活動を記憶し、また、その活動の中で知識を獲得し、体験や人とのかわりを学んできたことが、明らかになった。

キーワード：生活科、学び、知識、直接体験、かわり

1. はじめに

“生活の中で活動や体験を通して学ぶ”という考えは、幼児教育の基本的な考えである。小学校教育の中でその考えを基に実践しようとしているのが、「生活科」である。「生活科」導入以

*准教授 幼児教育学

**教授 幼児教育学

前は、小学校に入学してから高等学校を卒業するまで、教室の中で机の前に座り、教師の質問に答えるという形態で知識を習得するという授業が行われ続けてきた。そのような教育を受けてきた学生が大学に入り、幼児教育の授業の中で、子どもは生活の中で活動や体験を通して学んでいくものであると学んでも、多くの学生は簡単に理解するのがむずかしい様であった。教師中心の指導から子どもが主体の指導に変えなければならないのである。理論的には理解したとしても、実際に子どもに指導する場面では、自分の受けてきた教育のまま、教師が一方的に指導してしまうことが多くみられた。大学の授業を受けただけで、今まで自分が持ち続けていた教育観を全く違う教育観に変えることは難しいといえる。それは、それまで長年受けてきた学習形態によって作られた教育観と幼児教育が求める教育観が相反するものであるといえるからである。

しかし、平成元年に「生活科」が新設され、小学校教育においても一部の教科であるが、幼児教育と同じ教育観が導入された。そして、実際に小学校で「生活科」の授業を受けてきた学生が大学に入学し始めてきている。これらの学生は、小学校低学年において、様々な活動や体験を通して学ぶという経験をしてくれているのである。このような経験をもつ学生は、学習においても様々な取り組み方を行える可能性があるのではないだろうか。このことは、本学科において幼児教育を学ぶ上でも有効になるのではないかと考えられる。そこで、今回学生の学びに影響を与えると考えられる小学校での「生活科」での学習が、実際どのようなものであったかを学生の記憶を手掛かりに明らかにしていくことにする。

1. 研究目的

本研究の目的は、小学校で「生活科」が実施された当初に授業を受けていた学生の記憶を分析し、学生はどのように生活科を捉えたのか、その捉えが生活科の意図に合ったものであるのかを検討することである。

2. 生活科設立の背景

小学校における「生活科」は、平成元年の学習指導要領の改訂時に誕生した教科である。それまで1・2年の教科としてあった「理科」「社会」が廃止され、体験的学習を通して総合的な学習をおこなう教科として「生活」という教科ができたのである。

この生活科設立の背景としては、まず、社会の変化とそれに伴う子どもの生活や意識の変化

により、子どもの実体験が減少している現状があげられる。学習の基盤となる自然体験や生活体験の乏しい子どもが増加し、それが、子どもの「学ぶ力」「生きる力」を弱めている要因といわれている。また、小学校低学年における学習方法の再検討をおこなう必要性がうまれたことである。いわゆる「小1プロブレム」といわれる問題や学級崩壊など、従来の机の前に座って先生の話を書くという学習方法では特に低学年に多くの問題が生じ始めたのである。子どもの発達的特徴を捉えた学習方法への転換が必要なのである。このような状況を踏まえ、具体的な活動を通して思考するという幼児期から児童期にかけての発達上の特徴を踏まえた学習方法を重要視し、子どもにとって身近な家庭や学校、地域とのかかわりの中で学習を進めるといふ特徴をもつ「生活科」が誕生したのである。

3. 生活科の目標

平成元年版『小学校学習指導要領』¹では、生活科の目標を次のように示している。

「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」

それ以前の社会科と理科の目標は次の通りである²。

社会科

「社会生活についての基礎的理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」

理科

「観察、実験などを通して、自然を調べる能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を図り、自然を愛する豊かな心情を培う。」

社会科と理科の目標については、第1学年から6学年までの目標になっているが、これらの目標の一番の違いは、生活科の目標が、設立の理由を受けて「具体的な活動や体験」が前面に打ち出されていることである。ここでの具体的な活動や体験というのは、「自分と身近な社会や自然とのかかわり」をもつことであり、「自分自身や自分の生活」にかかわることである。そのかかわりを通して「関心をもつこと」「考えること」をし、「生活上必要な習慣や技能を身

に付ける」という学習になる。「自分」という言葉が使われ、関心を持つことも考えることをするのも身に付けるのも子ども自身である。子どもが主体となって進めていくという学習方法が示されている。これまでの学習方法の転換が示されている。

次に、知識の「理解」だけではなく、「生活上必要な習慣や技能」を身に付けることが目標になっていることである。子どもが家庭や学校、地域とのかかわりの中で具体的に活動や体験することを通して、そこで必要な習慣や技能を身に付けていくのである。ここでの具体的な生活上必要な習慣とは、健康や安全にかかわること、みんなで生活するためのきまりにかかわること、言葉使いや身体の振り舞いにかかわることなどであり、それらは、子どもが生きていくために基本的に必要な習慣である。また、技能とは手や体を使うこと、様々な道具を使うことであり、それは、生活科の学習が知識習得だけでなく、実践できることを重要視している。その道具がどのようなものかという知識だけではなく、その道具を実際に使うことができるようになることを目標としていると考える。そして、そこで身に付けた習慣や技能は、子どもが生活する上で実際に使われていくことになる。つまり、学習したことが、子どもの実生活に戻って生かされるということである。

そして、その過程が生活科の究極的な目標である「自立への基礎を養う」ことになる。ここでいう「自立」とは、学習上の自立、生活上の自立、精神的な自立という3つの意味がある。学習上の自立とは、自分で進んで学習活動を進め、考えなどを表現できるということであり、生活上の自立とは、生活上必要な習慣や技能を身につけ、自らよりよい生活を創りだしていきることである。そして意欲や自信をもって前向きに生活していくことができることである。

4. 生活科の内容

平成元年版の学習指導要領においては、生活科の目標を受けて学年の目標と学年ごとの内容が示されている。

《 第一学年及び第二学年の 目標 》

- (1) 自分の学校、家庭、近所などの人々及び公共物とのかかわりに関心を持ち、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動することができるようにする。
- (2) 自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心を持ち、自然を大切にしたり、

「生活科」導入時の学びについて

自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができようにする。

- (3) 身近な社会や自然を観察したり，動植物を育てたり，遊びや生活に使うものを作ったりなどして活動の楽しさを味わい，それを言葉，絵，動作，劇化などにより表現できるようにする。

この目標の中で示されていることは，子どもの生活している場での学習であるということである。それは「身近な」という言葉が使われていることからわかる。言い換えれば，生活する場が学習の対象になるということである。自分の家，家族，通学路，学校，いつも遊ぶ公園，店などすべてが学習する対象ということになる。そして，その対象へのかかわりは直接体験を通してであり，学習したまとめも，子ども自身の表現によるものと示されている。

また，ここでは1学年と2学年共通の目標として示されている。それは他の教科と違い，生活科が子ども自身の体験を通しての学習といえるからである。学年によって活動する場面はいろいろと設定はできるが，そこでの学びは学年が違うと違って区別されることはできないということである。

《 内 容 》

第一学年

- (1) 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり，学校において楽しく遊びや生活ができるようにするとともに，通学路の様子などについて調べ，安全な登下校ができるようにする。
- (2) 家庭生活を支えている家族の仕事や家族の一員として自分でしなければならないことが分かり，自分の役割を積極的に果たすとともに，健康に気を付けて生活することができるようにする。
- (3) 近所の公園などの公共施設はみんなのものであることが分かり，それを大切に利用することができるようにするとともに，身近な自然を観察し季節の変化に気づき，それに合わせて生活することができるようにする。
- (4) 土，砂などで遊んだり，草木や木の実など身近にあるもので遊びに使うものを作ったりして，みんなで遊びを工夫することができるようにする。
- (5) 動物を飼ったり植物を育てたりして，それらも自分たちと同じように生命をもっていることに気づき，生き物への親しみをもちそれを大切にすることができるようにする。

(6) 入学してから自分でできるようになったことや日常生活での自分の役割が増えたことなどが分かり、意欲的に生活することができるようにする。

第二学年

- (1) 自分たちの生活は近所の人や店の人など多くの人々とかかかわっていることが分かり、日常生活に必要な買い物や使いをしたり、手紙や電話などで必要なことを伝えたりするとともに、人々との適切に対応することができるようにする。
- (2) 乗り物や駅などの公共物の働きやそこで働いている人々の様子が分かり、安全に気を付けてみんなで正しく利用することができるようにする。
- (3) 季節や地域の行事にかかわる活動を行い、四季の変化や地域の生活に関心をもち、また、季節や天候などによって生活の様子が変わることに気づき、自分たちの生活を工夫したり楽しくすることができるようにする。
- (4) 身の回りにある自然の材料などを用いて遊びや生活に使うものを作り、みんなで遊びなどを工夫することができるようにする。
- (5) 野外の自然を観察したり、動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの変化や成長の様子に関心を持ち、またそれらは自分たちと同じように成長していることに気づき、自然や生き物への親しみをもちそれらを大切にすることができるようにする。
- (6) 生まれてからの自分の生活や成長には多くの人々の支えがあったことが分かり、それらの人々に感謝の気持ちをもち、意欲的に生活することができるようにする。

(.....線, ~~~線, ___線, ___線はすべて筆者)

内容においては、学年ごとに具体的な活動が示されている。その内容をみると1学年(3)(4)(5)の内容と2学年の(3)(4)(5)が共通した内容となっている。ここで示されている内容は、生活科の中で何を学ぶかという点からみると、3点に分けられる。まず、___線で示した「気付く」「分かる」などの言葉からも分かるように、対象に対する知識の獲得ということができる。次に~~~線に示したように、「生活する」「工夫する」「伝える」「利用する」「育てる」というように子どもが自ら実践するという直接体験を通して、「できるようになる」ということである。その直接体験の場が.....線で示した学校や家庭、地域など子どもの日常生活の場である。そして、___線に示した友達や家族、先生や地域の人々など、多くの人々とのかかわりの中で、自分について知り、学んでいくのである。

5. 研究方法

(1) レポートのテーマ

「記憶に残る生活科の授業について」

記憶に残っている授業内容について、①どのような内容であったか、②その授業についてどう思っていたか。③その授業で何を学んだと思うか、という3点について自由に記述をしてもらった。

(2) 対象学生

K 大学教育学部幼児教育学科

3年 31名 4年 4名 計 35名

生活科実施開始時に小学生で、生活科の授業を受けた学生を対象とした。

(3) 実施期日

レポートは2006年7月20日に提出されたものである。

(4) 分析の手順

学生が提出したレポートの文章を、内容によって①活動内容、②記憶に残った理由、③学びの内容の3つに分けた。その後、活動内容を小学校学習指導要領平成元年版に示されている内容から11つの単元に分類し、単元ごとに集計した。取り上げた理由と学びの内容については、3つのカテゴリー（人のかかわり・体験・知識獲得）を設定し、単元ごとにカテゴリーで分類し集計した。同じ単元の中で2つのカテゴリーが含まれた場合は、別にカウントした。（例えば、1人の学生の文にザリガニ飼育の楽しかった理由が体験と人のかかわりについて2つ記述されていれば、それぞれのカテゴリーでカウントした。）

6. 結果及び考察

(1) 記憶に残る活動内容の記述数

レポートの中にいくつの活動を取り上げているかを集計したのが表1である。その個数については、1つ活動をあげる学生が28.6%と一番の多かった。全体の傾向としては記述数が3個以下の学生が74.3%と、記述した個数が少ない学生が多かった。今回のレポートは約十年前のことを思い出して書くということで、何か特に印象に残るものがないと記憶に残っていないのではないかと考える。そのため、記述数が多くなかったと考える。1つの活動だけ取り上げて記述している内容を具体的に見ると、自分のことを調べてまとめる自分史作りをあげている学

表1 記憶に残る活動内容の記述数

活動数	学生数(名)	%
1	10	28.6
2	9	25.7
3	7	20.0
4	4	11.5
5	1	2.8
6	0	0
7	2	5.7
8	2	5.7
合計	35	100.0

生が3名いた。家族に話を聞いたり，調べたりする中で，親の思いや自分自身の存在を確認する初めての機会となり，印象深いものになったのではないかと考える。

(2) 単元別にみる活動の記述数

次に活動内容の記述数を単元ごとに集計した結果を示したのが表2である。学習指導要領の示されている内容については，記述数の差はあるがほとんどの内容について記述があった。唯一記述がなかったのが，1年の(6)の内容である。その内容とは1年間の学校生活を振り返り，できるようになったことを認め合い，次の活動への意欲につなげるというものである。振り返る活動だけだと印象に残らないかもしれない。また，いくつかの単元が重複する活動で，植物を収穫した後に取り組んだ祭りや〇〇大会などの記述もみられた。

次に単元別に記述した数が多い順にみていくと，全体の65.7%の学生があげたのが，アサガオや野菜などの植物栽培の単元にかかわるものである。植物栽培は，春から秋まで長期的な活動であるということ，子どもが1人1人自分の植物を育てる活動ということ，そのような体験が初めてだった子どもも多くいたようで，印象に残る活動になったと考えられる。この活動は，学習指導要領に示されている内容では1・2年の(5)の内容である。同じ単元になるザリガニやメダカなどの生き物を飼育する活動については，40%の学生があげている。この活動は，ただ飼育するというだけではなく，自分たちで捕まえるという活動や，水族館や生き物広場などをつくり発表するという活動も含まれている。中には，蚕を飼って絹糸まで紡ぐという活動をしたと記述した学生もいた。次に，45.7%の学生が記述したのが学校生活の単元である。学習

「生活科」導入時の学びについて

表2 単元ごとの記憶に残る活動の記述数

指導要領内容	単元	活動内容	記述数	%
1・2年(5)	植物栽培	アサガオ, サツマイモ, 野菜(トマト, ナス)	23	65.7
1年(1)	学校生活	学校探検, 名刺交換	16	45.7
1・2年(5)	生き物飼育	ザリガニ, メダカ, カエル, 蚕, アゲハ	14	40.0
2年(1)	地域	町探検, 地図作り	11	31.4
2年(1)	仕事	子ども郵便局, お店屋さんごっこ	11	31.4
1・2年(3)(4)	自然・遊び	自然物の収集, 自然物を使った作品作り	9	25.7
2年(6)	成長	自分史, アルバム, 絵本	7	20.0
2年(2)	公共物	乗り物の利用	1	2.9
1年(2)	家庭	手伝い	1	2.9
1年(6)	振り返り		0	-
2年(3)その他	交流	祭り, 餅つき大会, お別れ会,	7	20.0
活動内容の記述合計数			100	/35名

指導要領では一年の(1)の内容であり、活動内容のほとんどが入学時におこなわれる学校探検であった。次に31.4%の学生が記述した地域や仕事に関する活動があげられる。これらの活動は両方とも学習指導要領では2年の(1)の内容である。町探検と仕事の活動に関しては、一連の流れの活動として記述している学生も多かった。町探検で郵便局やお店などを見学し、その後、自分たちで郵便局ごっこやお店屋さんごっことして活動を展開するという形である。

(3) 記憶に残った理由

生活科の授業を受けてどう思ったかを記述してもらったところ、ほとんどの学生が「楽しかった」というような肯定的な思いを抱いていた。いろいろな楽しかった思いがあったからこそ、その活動を記憶していたと考える。その中で3人の学生が、「育てていたナスが病気になって枯れてしまい悲しかった」「ザリガニを誤って池に逃がしてしまい、クラス中で探して大変だった」「田んぼにはまった」という否定的な記述を書いていた。しかし、そのことで生活科の授業を否定的に捉えている様子はなく、こういうことがあったのも思い出の一つという記述であった。

記憶に残った理由を内容別に集計したのが、図1である。一番多かったのが、「体験」したことが楽しかったという理由で37%を占めた。ここでの体験とは、「自分」で「育てた」「採っ

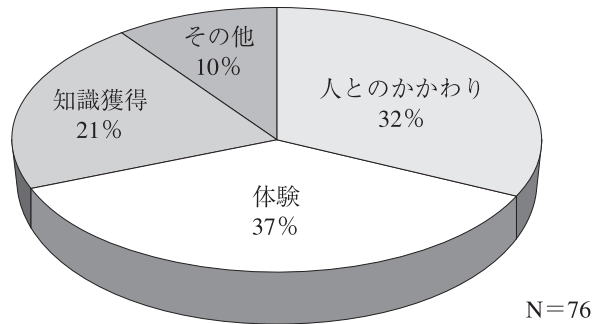


図1 記憶に残った理由（全体）

た」「準備した」「発表をした」というように自分自身で実際にやってみたという体験のことである。

次に、友達と一緒に活動することや先生や家族とのかかわりが思い出として残っているとあげたのが、32%であった。ザリガニなどを友達の助けをかりて触れるようになったという記述も多くみられた。できなかったことができるようになったということは、子どもにとって印象的な出来事である。そのきっかけが友達であるというのは、生活科ならではないかと考える。その次が、今まで気がつかなかったことを発見したり、自分で調べていく中で様々な知識を獲得したりすることが楽しかったと記述しているのが21%である。

この結果は、生活科が直接体験を重要視していることから考えるなら、当然の結果といえるかもしれない。自分自身で活動し、直接体験したからこそ、大学生になった今でも記憶に残っていると考える。

(4) 単元別にみる記憶に残った理由

単元別に記憶に残った理由を集計したが、自由記述だったため、集計数が少ない単元もあり、今回は6つの単元についての結果を図2に示した。結果を見ると単元ごとによって、記憶に残った理由に違いがみられた。「人とのかかわり」についての記述が多かったのが、「学校生活」と「成長」に関する単元である。「学校生活」については、学校探検でグループ活動をする中での友達との記述が多くみられた。学校探検は、小学校入学したすぐに行われる活動であり、クラスの子どもと一緒に行動したことや、新しい友達ができたことが楽しかったという記述であった。「成長」については、自分自身のことを調べるために家族にいろいろと聞く中、家族に対して感謝する気持ちに気がついたという記述が多かった。

「生活科」導入時の学びについて

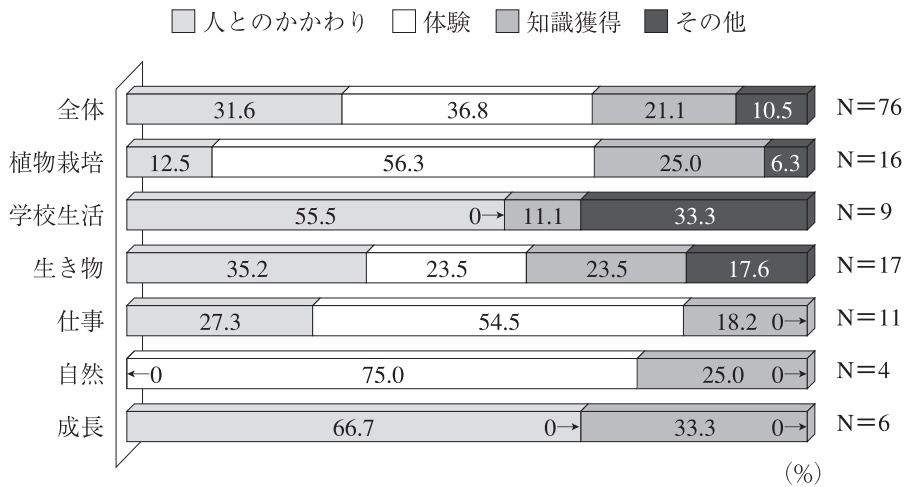


図2 記憶に残った理由 (単元別)

「体験」の記述が多かったのは、「植物栽培」、「仕事」、「自然・遊び」であった。「植物栽培」では、自分の植物の土作りから、水をやり、育てていく体験をする中で、芽が出た時の喜び、花が咲いた時の喜び、そして収穫し、自分が育てたものを食べた時の感動など記述されていた。「仕事」の単元においても、実際に郵便屋さんやお店屋さんになって、仕事をする楽しさ、それをするために、手紙や切手を準備したり、お店で売物を作ったりすることの楽しさなど、実際に体験する中でしか感じ取れないものである。それは、「自然・遊び」の単元においても同様で、四季折々の自然にかかわる楽しさは当然、いろいろな自然物を発見し、それで自分のオリジナルな作品を作ることの楽しさなどが記述されていた。

どの活動も実際に体験し、その中で友達や様々な人と関わりを持っている。少数であるが両方の内容を記述している学生もいる。その中で活動ごとにこのような違いが傾向として現れたのは、活動内容の違いによるものと考えられる。例えば、植物栽培では、1人1人プランターに栽培することが多い。その場合は体験が個々のものになっている。しかし、同じ単元でも生き物の飼育では、1人1人というよりクラスで何か生き物を飼って育てることが多い。世話などもグループごとに行われたりもする。そうすると、子ども同士のかかわりが多くなり、そのかかわりの中で学ぶことも多くなる。その結果、学生の記憶にも印象も強く残ったと考えられる。

(5) 学びの内容

自分が書いた活動を通してどのようなことを学んだかについての記述を集計したものが図3

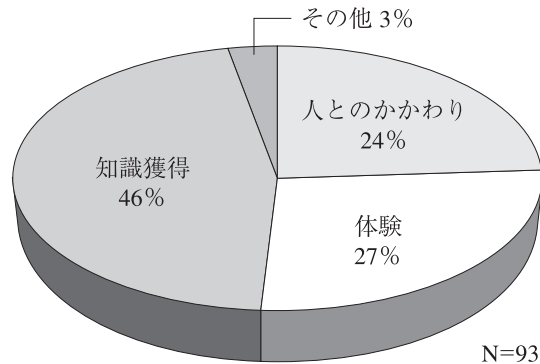


図3 学びの内容（全体）

である。学んだこととして一番多かったことが、知識を獲得である。記憶に残った理由と比べてみると、知識獲得は、21%から倍以上の46%になっている。学生の考えが学んだこと＝（イコール）知識という図式で捉えていることで、記述が増えたということもあると思うが、その内容は、実際に見たり触ったりすることで発見をしたり、生き物の育て方を調べて理解したり、町探検では、今まで知らなかったことを実際見たり、聞いたりすることで知ることができたというように記述されている。

そして、体験で学んだことは、自分で育てたり、捕ったりすること、自分で何をするか計画をたて、準備し、まとめたり、発表したりなど、自分で実際に活動したことであるという記述が多い。それは、1つの活動をやり遂げた達成感を感じることができたということである。自分はこのことができた自分自身で理解することである。それが、次の活動への取り組む自信となっていくと考える。また、人とのかかわりで学んだことは、友達と話し合うこと、協力して作り上げていくことというような記述がみられた。生活科の授業は、クラス単位の活動とは限らず、学年を超えた交流も多くみられる。また、何か活動するときは、個人1人で行うというより、グループ活動も多い。その中で学びも増えていくのではないかと考える。

(6) 単元別に見る学びの内容

記憶に残った理由と同様に、今回は6つの単元について学びの内容を集計したのが、図4である。その結果をみると、どの単元も知識獲得の割合が大きく、40%を超えている。いろいろな活動場面での学びが記述されている。生き物飼育では、生き物を捕まえ、直接その姿を見て、その生き物自体の知識を得る。その生き物を飼育するために、必要な知識を調べることで得る。

「生活科」導入時の学びについて

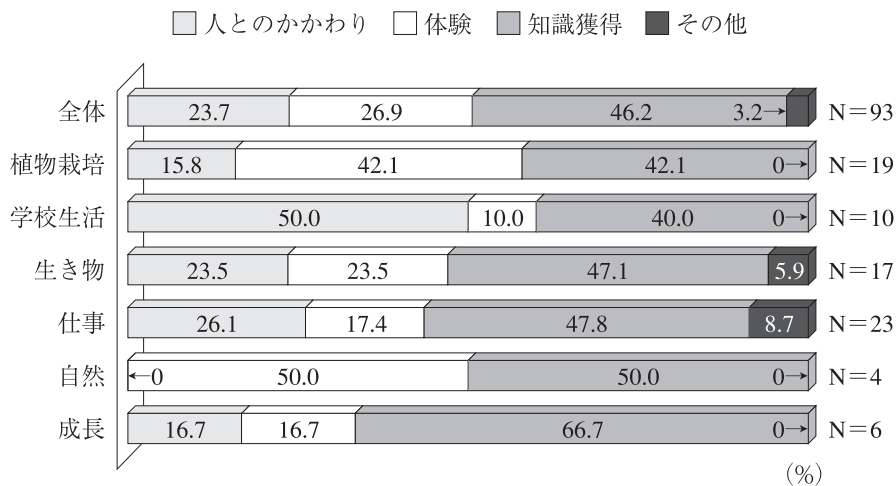


図4 学びの内容（単元別）

仕事の単元では、見学する中でしくみなどの知識を得る。実際に自分たちでその仕事を体験することで、仕事の流れの知識を得る。活動すべてに学びがあるといえる。

「学校生活」では、知識獲得だけでなく、人とのかかわりを学んだと捉えた学生が多く、「植物栽培」と「自然・遊び」についても、体験からの学びが多くなっている。これらの単元は、記憶に残った理由でも割合が多く、楽しい理由の中に学びという要素が含まれるといいのではないかと考える。植物栽培では、種から芽が出て、双葉になり、成長して花を咲かせる。実がなり、種ができる。その一連の過程を直接体験することで、多くの発見があり、知識を得ることができる。また、その1つ1つの体験が子どもにとって喜びであり、楽しい活動となっている。しかし、水やりを忘れてたり、逆にあげすぎて、腐らせたりという体験もすることで、植物を育てることは簡単でないことも学ぶことができる。

7. まとめ

以上の結果から、学生の思い出し記録の分析から捉えた実施初年度の「生活科」の学びの内容として、次のようなことが明らかになった。

(1) 直接体験による学び

活動についての記憶は、自分自身の直接体験を通してのものがあげられていた。生活科の特

色でもある直接体験を通して学習が行われるという方法は、学生の記憶の中でも明確に残っていた。これらの実践においては教室の外に出ることも多く、他の教科とは異なる学習方法であったため、学生たちは他の教科とは違う楽しい活動として記憶し、生活科=(イコール)遊びの時間という捉え方をしている学生もいた。確かに楽しく活動すること、楽しく遊ぶことも、生活科の目標になっている。しかし、その部分だけ強調されて、遊んだり体験するだけという「生活科」の現状が、逆に問題となっている。そのことは、平成10年度と平成20年度の学習指導要領改訂においても重要なポイントとなっており、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高めることが課題としてあげられている。

また、学習指導要領においては、地域のかかわりが重要視されているが、学生の記憶の中にその地域の独自性がほとんど読み取れなかった。実施当初ということで地域をどのように生活科の活動の中に取り入れていくかが教師側でもまだ模索中であったことが考えられる。この点についても次回の改訂のポイントになっているので、その取り組み方に変化がみられる可能性がある。

(2) 直接体験による学びの構造化

いろいろな活動での直接体験を通して、知識獲得を中心に体験そのものや人とのかかわりを学んでいた。生活科における学びとは、活動や体験のいろいろな場面で知識を獲得すること、経験を積むこと、人とのかかわりなどが、その目標としてあげられている。それは、ただ単に活動や体験をするだけで生まれてこない学びである。直接体験による学びを質的に高めていくこと、つまり構造化するためには、子どもの主体的な取り組みが必要である。そのためには、気づき→問題の具体化→問題解決→気づきという過程が必要なのではないかと考える。その過程の中に問題解決学習が含まれる必要があるのである。「たこあげ」という活動でも、作り方を習ってたこをあげるという活動をただするだけでは、何も学びは生まれません。「どう作ったら、よく上がるのか」「どちらの方向に走ったら、よく上がるのか」という子どもの気づきがあり、そのために子ども自身が試行錯誤する中に学びが生まれやすくなるのである。生活科がより効果的な学習が行われるためには、子ども側の学びの内容についての検討、教師側の教材や教育方法の吟味などが必要になってくるであろう。

平成10年度、平成20年度の小学校学習指導要領の改訂により、子どもたちの学びや教師の教育内容等、どのように変化していくか今後も引き続き調査を行い明らかにしていきたいと考える。

「生活科」導入時の学びについて

引用文献

- 1) 文部省, 『小学校学習指導要領解説 生活編』, 平成元年
- 2) 文部省, 『小学校学習指導要領』, 昭和52年

参考文献

- 1) 文部省, 『小学校学習指導要領解説 生活編』, 平成11年
- 1) 文部科学省, 『小学校学習指導要領解説 生活編』, 2008
- 3) 中島重人編, 『生活科の解説と実践』, 小学館, 1987
- 4) 内藤博愛著, 『気付きを深める生活科 授業の創造』, 明治図書, 2005